テキストらしさとは何か
ー 照応現象に見る認知主義の妥当性[1]ー

山 本 英 一（関西大学）

1

ある言語表現が、それに続く言語表現と同一の対象または内容を指示する場合、一般に両者は「照応関係」にあると言われる。前者を《先行詞》(antecedent)、後者を《照応詞》(anaphor)と呼び、例えば、一つの文の中で両者の関係を明示的に捉えることが、かつての生成文法理論では一つの重要な研究テーマであった。例えば、

(1) $\text{McCabe}_{(i)}$ said (that Smith shot $\text{him}_{(i) \text{ or } (j)}$)

補文に現われたhimには二通りの解釈が可能である。一つは主文の主語McCabeを指している場合。一方、McCabeでもSmithでもない第三の人物を指すとも考えられる。このような照応関係を的確に理解するには、《主文》、《補文》、さらには《主語》といったような概念が必要である。すなわち統語論的情報を考慮に入れなければ、照応関係は捉えられない。したがって、これに類するなデータは、統語論的知識が、意味・語用論的知識とは独立して存在し、統語理論研究の重要性を示唆している。

しかし、その一方で、照応関係を論じるには、次のような資料も見逃すことはできない。

(2) Now <u>Albert Wells</u> declared. 'I don't like hospitals. I never have liked them.' 'If you stay here,' <u>the doctor</u> demurred, 'you'll need medical attention, and a nurse for twenty-four hours at least. You really should have intermittent oxygen too.'
The little man insisted. 'The hotel can arrange about a nurse.' <u>He</u> urged Christine, 'You can, can't you, miss?' (A. Haily: *Hotel*)

ここで代名詞Heの先行詞としては、先行文脈にあるAlbert Wellsまたはthe doctorの二通りが考えられる。実際にはHe = Albert Wellsなのであるが、統語論的情報だけで、このことを把握することは不可能である。なぜならば、統語論が考察の対象とする単位の上限はセンテンスであり、この例における照応詞と先行詞の間には、統語論が越えられぬ文境界(sentence boundaries)がいくつも存在するからである。

それにもかかわらず、わたしたちはこのような照応関係を正しく理解できる。それは、文を処理する統語論レベルとは別に、文の集合体、すなわちテキストを扱うレベルが存在し、(2)のような照応現象はそこで処理されているからだと考えられる。そこで、以下では、日英両言語における照応問題の観察通して、その母体となるテキストの分析のあり方を考えてみたい。

2

テキストとは、話し手と聞き手の間のコミュニケーションを成立させるに足る意味を伝達し得る、原則として複数個の文の集合体と考えられる[2]。さらに、de Beaugrande and

Dressler (1981)では、文章のかたまりがテキストとして認識される要件、言い換えれば「テキスト性」(textuality)認定の具体的な基準が提案されている。すなわち、

(3) a. 結束構造 (cohesion)、 結束性 (coherence)
b. 意図性 (intentionality)、容認性 (acceptablity)、 情報性 (informativity)、
場面性 (situationality)、テキスト間相互関連性 (intertextuality)

の7つである。このうち、(3a)の基準は文章そのものに備わっているべき性質であり、(3b)の諸要件には、与えられた文章に対する言語使用者の判断など、言語外の条件が含まれる。前者を「テキスト中心の概念」、後者を「言語使用者中心の概念」と呼ぶとするならば、テキストはこの二種類の要件が満たされてはじめて成立するのだということができる。

本論で扱おうとする照応の問題とは、「ある対象がいかなる言語形式で表わされるか」ということであり、その意味において、これは「テキスト中心の概念」、とりわけ(3a) 結束構造の問題に属する。しかし、その一方で、ある文脈の中で言語形式を選択するのは紛れもなく書き手・話し手であり、そこには「言語使用者中心の概念」が関わらざるを得ない。つまり、照応現象には「形式」と「使用者」の両方が関わっており、どちらに目を向けるかで、その眺望がまったく異なってくる可能性がある。実際、例(1)からもわかるように、生成理論では、使用者が排除され、形式のみを追求する、狭義の「照応」問題が論じられている。しかし、文のレベルを越えて名詞句が指示するものを考えようとすると、文脈と言語使用者の関わりあいを避けて通ることはできない。

例えば、文脈の中で照応を論じるAriel (1990)は次のように主張する。

(4) I believe that **only the cognitively defined Accessibility theory** can explain a speaker's choice among referring expressions .... (Ariel 1990:171、ゴチック体筆者)

これは、言語現象を、言語使用者である人間の認知能力で説明しようとするもので、同じような考え方は、例えばSperber & Wilson (1986)が近年提唱した「関連性の理論」にも見られる。言語データを分析するにあたり、生成理論のように形式が織りなす規則性に着目する立場を「形式主義」と呼ぶならば、ArielやSperber & Wilsonに代表される立場は「認知主義」とでも呼ぶべきもので、最近注目されているアプローチ法ではある。

言語研究といいながら、その実、形式面のみを追求し、人間の言語能力解明といいながら、実際には人間不在だったのが生成理論であった。言語現象を説明していく上で、言語と対峙する人間、とりわけ人間の認知能力を射程に入れようとする動きは、過去の言語研究への反動として、当然あるべき流れである。しかし、その半面、先のArielの発言に代表されるように、「認知主義」的手法だけが特定の言語事象を説明し得ると断定することは、わたしたちに物事の本質を見誤らせる可能性がある。以下では、Arielの考え方と具体例をつきあわせながら、そのあたりを詳しく検討していくことにする。

3

まず、次の例文を考えよう(Blakemore 1992:67)。

(5) (a) <u>Tom</u> is here. He has brought you a present. [pronominal reference]
(b) <u>Tom</u> is here. **The kind boy** has brought you a present. [definite description]
(c) <u>Tom</u> is here. ?? **Tom** has brought you a present. [repetition]

先行文脈にあるTomを後続の文中で受ける場合、英語では、(5a)のように《代名詞》または(5b)のように《定記述》（定冠詞+名詞）の形を取るのが一般的である。一方、(5c)のように、同一名詞句を繰り返すと、きわめて不自然だといわれる[3]。Ariel (1990)もこの点に注目し、同様の例文をあげている。

(6) Geraldine Ferraro has been an active Democrat for quite a few years.
(a) She ran for Vice Presidency only in 1984.
(b) The woman from New York ran for Vice presidency only in 1984.
(c) ?? Geraldine Ferraro ran for Vice presidency only in 1984. (Ariel 1990:17)

例文(5c)、(6c)では容認度が低くなっていることからもわかるように、照応詞の選択は、書き手・話し手が、恣意的にではなく、何らかの制約のもとに行っているものと予想される。

一般に、私たちは、与えられた言語情報を効率的に処理するために、いろいろな形で先行文脈を参照している。そこで、Arielは、文脈に対するアクセスの度合いをAccessibility、各文脈に対応する照応詞をAccessibility Markerと呼び、照応詞選択に関して、次のような二つの階層 (hierarchy)を提案した。

(7) Accessibility Hierarchy [I] : Types of Context (Ariel 1990:17)
(a) Encyclopedic Knowledge < (b) Physical Environment < (c) Linguistic Context

(8) Accessibility Hierarchy [II] : Accessibility Markers (Ariel 1990:73)
(a) Full Name < (b) Definite Description < (c) First or Last Name < (d) Demonstrative < (e) Pronoun < (f) ϕ

読み手・聞き手にとって、情報処理にあたって最も身近にあって参照し得る(accessible)ものは、書き手・話し手と共有する(con-)テキスト(text)、すなわち文字どおりの《言語文脈》(=7c)である。次に《物理的空間》(=7b)があり、最後に文化的背景知識を含む《百科事典的知識》(=7a)が続く。

一方、それぞれの文脈には、いくつかのマーカー、すなわち照応詞が対応する。例えばテキストの中で、何の前置きもなく登場し得る《人名》などは、言語使用者が共有する《百科事典的知識》に属し、相対的Accessibilityは低い(= 8 a, b, c)。反対に、先行詞が《言語文脈》に現われている場合、後続の照応詞は《代名詞》または《省略》の形を採り、このとき最もAccessibilityが高い。テキストに現われる照応詞の選択・分布は、この階層をもとに正しく予測できる、というのがArielの説明である。

このことを、先に例としてあげた(2)に関して、具体的に見てみよう。

(9) Now Albert Wells declared. 'I don't like hospitals. I never have liked them.'
'If you stay here,' the doctor demurred, 'you'll need medical attention, and a nurse for twenty-four hours at least. You really should have intermittent oxygen too.'
The little man insisted. 'The hotel can arrange about a nurse.'
He urged Christine, 'You can, can't you, miss?' (A. Haily: *Hotel*)

Albert Wells と The little man は同一人物を指しており、本来《代名詞》を用いることのできる場面である。ところが、二つの間には、the doctor という別の人物が介在しており、文脈における相対的なaccessibilityは、the doctor > Albert Wells となる。したがって、こ

こでaccessibility の高いマーカーである《代名詞》を用いると、 the doctor を指示することになるので、accessibilityの低いマーカーとしての《定記述》が選ばれる[4]。しかし、その直後では、Albert Wells (= The little man) > the doctor となるために、今度は accessibility の高いマーカーの《代名詞》が用いられたのだ、と説明される。

さらにArielの主張で重要なのは、Accessibility Hierarchyに基づいて行われる照応詞の選択は、《記憶》という人間の認知能力に還元することが可能だとする点である。

(10) Long-term Memory　　Short-term Memory

Encyclopedic Knowledge ⇔ Physical Environment ⇔ Linguistic Context

すなわち、《百科事典的知識》は、わたしたちの長期記憶の中に蓄えられており、必要に応じていつでも引き出すことのできるデータ群であり、一方《言語文脈》は、現在進行中の談話と並行して参照可能な、短期記憶が受け持つデータ群である。したがって、文脈のタイプの違いに対応している照応詞の選択もまた、究極的には、長期記憶・短期記憶という認知上の役割分担に依存している、と説明されることになる。

しかし、このような論理展開は、英語に限らず一般的な言語現象を分析する上で、きわめて重大な意味合いを帯びてくる。なぜなら、認知能力は人間共通の要素であり、したがって、これに頼る限り、いかなる言語の照応現象も、同一の認知的制約で説明されることになるからである。事実、Arielは、日本語の照応現象についても長期記憶・短期記憶のスケールにのるものとし、次のようなAccessibility Hierarchyを提案している。

(11) Accessibility Hierarchy for Japanese : Accessibility Markers

(a) Noun / Pronoun + *wa* < (b) Noun / Pronoun + ϕ < (c) ϕ (Ariel 1990:90)

これによると、日本語では、直前の言語文脈に登場し、したがって短期記憶に残っている指示対象は《省略》の形をとり(=11c)、長期記憶に保存された情報は助詞の「は」でマークされる(=11a)。英語の階層 (=8)に比べて、表現形式の面でバリエーションに欠けてはいるが、この照応詞の分布は、基本的に英語と同じ認知的制約にしたがうものとされる。

4

照応現象を、《記憶》という切り口から眺めると、確かにArielの言うような階層が存在し、秩序正しくマーカーが選択されているように見える。しかし、実際のテキストを観察すると、反例となるものもきわめて多い。まず、英語から見てみよう。

(12) The Head of State handed Ignatius a small automatic pistol.

"Because I suspect by now that you have almost as many enemies as I."

Ignatius took the pistol from the soldier awkwardly, put it in his pocket and mumbled his thanks.

Without another word passing between the two men Ignatius left his leader and was driven back to his Ministry. (J. Archer: *A Twist in the Tale*)

この例では、Ignatiusという人物は連続するセンテンスに登場していながら、Accessibilityの低い《人名》が繰り返されている。(8)のスケールにしたがえば、《定記述》または《代名詞》が選択されるべきところである。一方、The Head of Stateも、連続するセンテンスに現われながら、ともに《定記述 》(e.g. the soldier, his leader)が用いられており、《代名

詞》を予測するHierarchyに反している[5]。

また、英語では次の例に代表されるようなケースも多い。

(13) For Machiko Atsuta, buying seasonal gifts used to be a hassle. With a part-time job, three swimming sessions a week and volunteer work, who had time to shop? Then the 57-year-old homemaker discovered mail-order shopping. Now she simply gets on the phone and picks her gifts from a catalog. (*Newsweek*, September 6, 1994)

ここでは、 the 57-year-old homemaker の先行詞は Machiko Atsutaであり、文と文の間に指示対象となるべきものは他にないので、Accessibilityはきわめて高い。したがって、Arielの階層にしたがうならば、本来《代名詞》が用いられるべきである。それにもかかわらず、ここには《定記述》が現われている。さらに興味深いことは、定冠詞がついてはいるものの、この名詞句から推論される

(14) Machiko Atsuta is a 57-year-old housemaker

という命題は、文脈の中で初めて提示される情報だということである[6]。つまり、ここでは、Ariel のAccessibility Hierarchy が予測する、いわば「形態上の秩序」よりも、むしろ「情報量の豊さ」が優先しているといえる[7]。

(15) 情報量 ＞ 形態的整合性

このことは、(13) の例に限らず、英語のテキストそのものが一般的にもっていると考えられる特性であり、これを抜きにして英語の照応現象を論じることはできない。

これに対して、日本語の場合はどうだろうか。まず次の例を考えよう。

(16) 鮎太は呼び出されて、風呂に入っている彼女のために、薪をくべてやることがあった。鮎太はみごとなはち切れそうな雪枝の白い肉体が眩しかった。鮎太は雪枝の方は向かずに単語のカードをめくっては、火吹竹を吹き、又単語のカードをめくった。（井上 靖 『あすなろ物語』）

(11) に示されたArielの予測に反して、例(16)では同一の名詞句「鮎太」が繰り返し現われる。ここでは、たまたま主格の名詞句が連続しているが、このような現象が格の種類とは関係のないことは、次の例 (17) が示す通りである。

(17) 彼女は、私にアライさんというロス市警の捜査官を紹介したくれた。食事どきに落ちあったが、アライさんのほうに予定があって、たがいにコーヒーだけを飲んだ。アライさんは長身で、粗い織りのブレザーがよく似合う陽気な好漢だった。アライさんのかつての上司は、有名なジミー・佐古田氏である。私は佐古田氏が書いた『ロス市警アジア特捜隊』という本を読んでいたから、アライさんを見たとき、ドラマの中から出てきた人物のような印象を受けた。かれはブレザーの内側に銀色のピストルをもっていた。（司馬遼太郎 『アメリカ素描』）

いずれも、日本語として特異なテキストとは言い難い。照応詞のこのような繰り返しは、文章の流れの中にあっては、むしろ自然である。この点は、先の英語の例文(5 c)、(6 c)において、繰り返しは不自然であるとした指摘とは、きわめて対照的なことに注目したい。

実際、日本語における繰り返し現象に着目し、次のような説明を試みた学者もいる。

(18) ... in Japanese a single nominal mention is often insufficient to establish a new character as eligible for ellipsis. In fact, the use of nominal reference at the shift from introduction to action in Japanese is perhaps best regarded as a strategy which ..... serves as another

opportunity for the speaker to establish a new character firmly in the mind of his listener before becoming involved in the plot line and mentions of other characters. (Clancy 1980:155)

少々長い引用だが、要は、テキストが展開していく際に、読み手（または聞き手）が登場人物を記憶にとどめるために、日本語では１度言っただけではダメだ、ということである。

しかし、この主張は、次の二つの理由で妥当性を欠くといわざるを得ない。第一に、「なぜダメなのか」という本質的な問いに答えていないから。第二に、認知能力に個人差・民族差があるという、強引な理由づけをしているからである。つまり、Clancyが示唆するところは、繰り返しを不自然とする英語使用者と比較したとき、繰り返しをむしろ必要とする日本語の使用者にあっては、少なくとも短期記憶に関して、その容量が少ない（あるいはメカニズムが異なる）ということである。けれども、同じ人間でありながら、《記憶》という基本的な認知能力に、それほど重大な違いが存在しているとは考え難い。ましてや、例 (16) (17) で見たように、一度ならず二度、三度と、立て続きに繰り返しを必要とする記憶とは、まさに健忘症的記憶であって、これを認めるわけにはいかない。

5

これまでの議論からわかることは、少なくとも照応現象を、《記憶》という認知的要因に還元しようとする試みには無理があるということである。にもかかわらずArielは、自らが提案する階層の反例となる現象に対しても、さらに別の認知的説明を加えようとする。すなわち、

(19) ***Henry*** went to the party while ***John*** stayed at the store.

の後に、次のような文が続いたとき、

(20) (a) <u>He</u> *worked* with little enthusiasm. [he = John]
(b) <u>He</u> *danced* with some women. [he = Henry] (Ariel 1990:171)

読み手（聞き手）が、(20a)ではHe = Johnであり、(20b)ではHe = Harryだ、と間違いなく先行詞を確定できるのは、わたしたちがSperber and Wilson (1986)のいう《関連性》を求めて問題となる文を処理しているからだと考えるのである。

「関連性の理論」とは、聞き手（読み手）が「最小の処理労力で最大の文脈的効果、すなわち意味を得ようする」(Sperber and Wilson 1986:150)という考え方である。上の(20b)の例においては、代名詞Heの先行詞は、ArielのAccessibility Hierarchyにしたがうならば、Henryではなく相対的Accessibilityの高いJohnのはずである。ところが、直前の文脈から、読み手（聞き手）の頭には「パーティの場面」と「店の場面」が喚起されており、それを前提に(20b)を処理すると、He = Harryとなる。なぜならば、「店に残った」Johnよりも、「パーティへ行った」Harryが「女性と踊った」と考えるほうが文脈上の整合性が高い、つまり文脈的効果が大きいと考えられるからである[8]。

情報量と処理労力を天秤にかけて導きだす《関連性》とは、テキストを処理する上で、きわめて論理的かつ合理的な手順を必要とする概念であり、上の例にもあるように、少なくとも英語に関しては、Accessibility Hierarchyの不備を補完し得る手段のように見える。ところが、この概念の根底にある「文脈的効果」とは、次のように「認知的環境を変化さ

せること」というように、認知的産物として定義されるために、英語はともかくとして、日本語に目を転じたとき不都合が生じてくる。

(21) All a speaker or any other type of communicator can do is present a stimulus, hoping that its perception by members of the audience will lead to a modification of their cognitive environment and trigger some cognitive processes. (Sperber & Wilson 1986:150)

つまり、日本語における名詞句繰り返しは、読み手（聞き手）の認知的環境をあらためて変化させることはないのであって、したがって「文脈的効果」はない。いわば情報量ゼロの表現なのである。それにもかかわらず、これが多用されるということは、日本語使用者の認知の在り方が（少なくとも英語話者と比較したとき）特異なのだ、という議論に、またしても結びつく可能性がある。結局、Accessibility Hierarchyを《記憶》という認知的要因に還元しようとしたときと同じ壁にぶつかってしまうのである。

6

照応現象、ひいてはテキストの展開を見る上で、認知的説明が不十分であるとすれば、それ以外にどのような要因を考えればよいのか。まず、Arielの次の発言に注目しよう。

(22) In fact, I suggest, inferencing for the sake of reference assignments is probably cost-free. (Ariel 1990:175)

これによると、先行詞確定に係る推論作業は処理労力を要しない。したがって、次の各例においても、定冠詞を含む名詞句の先行詞がa candleであることは、たとえ(23c)のbayberryのように意味的結びつきが弱いものでも、容易に確認することができるという。

(23) (a) I bought a candle yesterday, but the wick had broken off.
(b) I bought a candle yesterday, but the wrapper was torn.
(c) I bought a candle yesterday, and the bayberry smelled great. (Clark & Marshall 1981:40-41)

また、次の例のように、Zheng Xumin is a retired professor from Beijingという命題が、先行する文脈にない場合でも、the retired professor from Beijingの先行詞がZheng Xuminであることは簡単にわかる、というのである[9]。

(24) When 67-year old Zheng Xumin developed a stubborn cough last year, he thought he had a cold. So the retired professor from Beijing took a month long vacation. (*Newsweek*, May 17, 1993)

しかし、そのような論理は、英語以外の話者、特にわたしたち日本語話者のように、定冠詞という文法的手段をもたない者には通用しない[10]。

ただし、Arielの指摘は別の意味において重要である。つまり、英語には定冠詞という文法的形態があるために、照応詞と先行詞とを関連づけるために必要な推論が意識されないほど、隣接する文の結びつきが強い、と言い直すことができるからである。

(25) [# S_1...Antecedent...# ... # S_n...Anaphor...#] （英語）
[...] = text boundary, #... # = sentence boundary, S = Sentence

それに比べると、定冠詞を欠き、また繰り返し表現を多用する日本語は、文の独立性が相

対的に高いといえる。例えば、英語からの翻訳において、ただ名詞句を繰り返すのではなく、次例のように文脈解説的な動詞句が使われ、さもなければ先行文脈とのつながりがぼやけてしまうのは、一つ一つの文の独立度が高いことの証左である。

(26) Without looking up, the President gripped the putter and studied the next ball.... The golfer looked up briefly and smiled, then returned to his game. (J. Grisham: *The Pelican Brief*)

大統領はパターを握り、次のボールをじっと見ていた。（中略）ゴルフの練習に興じていた大統領／？ゴルファー は、ちらっと顔を上げて薄笑いを浮かべると、再びプレーに戻った。

文の独立性に関する議論は、次の例にもあてはまる。

(27) She slipped. The road was icy.

(28) 彼女はすべって転んだ。

(a) ? 道が凍っていた。　　(b) 道が 凍っていたのだ。

二つの文の因果関係は、英語(27)では必ずしも明示的な標識がなくても了解されるようである[11]。しかし、日本語の場合、何らかの補助手段ー例えばムードを表わす「のだ」ーがなければ、少々わかりにくく、したがって(28a)は一連のテキストとして解釈しようとすると不自然さが伴う。また、理由を表す語尾「からだ」が必要な次の例も同様である。

(29) Christine, who missed nothing of the exchange, supposed she should be flattered to be mistaken for a call girl. From rumors she heard, Herbie Chandler's list embraced a glamorous membership. (A. Haily: Hotel)

だが、クリスティンはその暗黙のやりとりを目ざとく見てとった。そして、自分がコール・ガールとまちがえられたことはむしろ光栄かもしれないと思った。ハービー・チャンドラーの名簿に載っている女は、いずれも魅惑的な美女ばかりだという噂を (?) 耳にしていた / 耳にしていたからだ。（高橋 豊訳）

このように、日本語では、二つの文を並べただけでは有意義な文章にはならない。つまり、一つ一つの文が意味的に独立しており、何らかの形態的補助を受けなければ、それぞれが断片的な情報になってしまうのである。これを、先の英語と場合と対比する形で図示すると次のようになるだろう。

(30) [{#S_1...NOUN...#}{#S_2#} ..... {#S_n ...NOUN (+Verb Phrases)...#　(+ α)}]（日本語）

[...] = text boundary, #...# = sentence boundary, {...} = intermediate text boundary ,

S = Sentence, α = auxiliary morph

ここで、文と文の間に、{...}で示されるような《中間的テキスト境界》が介在している点に注目してもらいたい。

7

どの言語においても、テキストを構築する際に、ただ文を積み上げているのではない。本論で取り上げたように、名詞句（照応詞）がどの名詞句（先行詞）を指示するのかという問題も、文章の意味的首尾一貫性 (coherence) を確保する上では、きわめて重要である。そして、いかなる照応詞が選択されるかによって、テキストらしさに違いが生じることも事実である。したがって、テキストが成立する要因を考えようとするとき、照応現象を無視して通り過ぎるわけにはいかない。どのようなメカニズムが背後にあるのかを究明する

必要がある。Ariel (1990)は、この問いに対する認知的解答であった。

しかし、ここで日英語のテキストを比較してわかったことは、認知主義に固執する限り、照応現象を適切に分析することはできないということであった。そして、言語使用者の認知的要因とは別に、文のレベル、さらにテキストのレベルで各言語が独自にもつ情報構造を解明しなければ、適正な議論は期待できないのである。具体的に独自の情報構造とは、

(a) 日本語では隣接する文の意味的独立性が高く、テキスト中で旧情報の繰り返しが多く、
(b) 英語では隣接する文の意味的依存性が高く、テキストの中で新情報の付加が容易である

ということであった。そして、言語レベルに見られるこの特異性は、 Arielが言うような認知的要因に先んじて存在する制約であることも、ここで改めて確認しておこう。

最後に、「それでは、各言語の特異性は何に由来するのか」という問いが新たに出てくるが、率直に言ってまだ答えはわからない。例えば日本語では、敬語に代表されるように、話し手（聞き手）がおかれた状況が正しく把握されてはじめて適切な表現、テキストが産出される。つまり、言語外の文脈への依存度が高い。一つ一つの文だけを取り出してみると、完結的、断片的に見えるのは、そのあたりと関係があるのかも知れない。そういう意味で、次のBrown & Levinson (1987:279)の言葉は示唆的ではある。

(31) It should be clear that the syntax and semantics of Japanese are profoundly affected by this impingement of social forces on pronominal and verbal system. For instance, the free deletion of subjects and the non-existence of proper possessive pronoun can be attributed to the pragmatic encoding of person in the kind of honorific chosen."

このへんの詳しい検証作業は別に稿を改めることとしたい。

注

1　本論は、平成６(1994)年１０月１５日に、近畿大学に於いて開催された、第３回日本英語コミュニケーション学会年次大会で、「テキスト成立の要件を考える」という題で発表した原稿に、加筆・修正を加えたものである。

2　「原則として」という条件をつけたのは、次のように一つの文からなる「テキスト」をも排除しないためである。 "RESUME SPEED"、"頭上注意" （道路標識）

3　例えば、Donellan (1978:58)を参照のこと。

4　今回は、話し手と聞き手が物理的空間を共有しない《書き言葉》に注目しており、物理的環境、およびそれに対応する照応詞としての「指示詞」は考慮の対象外としている。

5　当然、ここでは代名詞を使うことによって生じる曖昧性を回避しようとする書き手側の配慮がある。後に触れるように、《情報量の豊さ》という要素がArielの提案する階層に優先している例である。

6　このように、定記述の中に新しい情報を盛り込もうとするのは、英語のテキストの大きな特徴である。筆者は《観念的次元》、《対人的次元》、《修辞的次元》の存在を提案し、これを情報構造全体の中で捉える試みを行った。詳しくは、山本(1994a)を参照。

7　ただし、「意味的曖昧さを生じない範囲で」という条件付きである。

8　「関連性」という考え方をとれば、例えば(9)において、"He insisted ... "ではなく"The little man insisted ..."のように、「処理労力」の大きい《定記述》がなぜ使われたかの説明は確かに明確になる。すなわち、《定記述》自体は、《代名詞》に比べると、

読み手（聞き手）に解釈の上で、より多くの負担を強いるが、その反面、先行詞が直前のthe doctorではないことを示し、文脈上無用な曖昧性を回避することができるからである。いうなれば、情報量、あるいは情報としての価値が、処理にかかる労力を十分に上回っていると見なされるのである。

9　山本(1994a:51)を参照のこと。

１０　英語のテキストを聴き取る際に、日本人学習者は、先行詞確定の困難さに感じるようである。詳しいレポートは、山本(1994b)を参照のこと。

１１　例えば、Blakemore (1987:105)に、この趣旨の言及がある。

参考文献

Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-phrase Antecedents*. London: Routledge.

de Beaugrande, R., and W. Dressler (1981) *Introduction to Text Linguistics*. London: Longman.

Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraint on Relevance*. Oxford: Basil Blackwell.

_____. (1992) *Understanding Utterances*. London: Blackwell.

Brown, P., and S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universal in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chafe, W. L. (ed.) (1980) *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, N. J.: Ablex Publishing Co.

Clancy, P. M. (1980) "Referential choice in English and Japanese narrative discourse." In W. L. Chafe (ed.), pp. 127-202.

Clark, H. H., and C. R. Marshall (1981) "Definite reference and mutual knowledge." In A. Joshi, B. Webber, and I. Sag (eds.), 10-63.

Cole, P. (ed.) (1978) *Syntax and Semantics, vol. 3*, New York : Academic Press.

Donnellan, K. S. (1978) "Speaker reference, descriptions and anaphora," in P. Cole (ed.), 47-58.

Joshi, A., B. Webber, and I. Sag (ed.). (1981) *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D., and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Basil Blackwell.

Werth, P. (ed.) (1981) *Conversation and Discourse*. London: Croom Helm.

山本英一 (1993) 日英語の語彙的結束構造：テキストにおける情報の流れを考える、*The JASEC Bulletin*, vol. 2, no. 1, 37-42。

_____(1994a) 多次元的情報構造：新情報と旧情報を見直す、『英語表現研究』（日本英語表現学会）第１１号、46-54。

_____(1994b)聴き取り指導におけるテキストの情報構造、近畿大学語学センター紀要、第３巻 第１号、106-113。